

金に執着するファリサイ派の人々が、この一部始終を聞いて、イエスを嘲笑った。そこで、イエスは言われた。「あなたがたは、人に自分の正しさを見せびらかすが、神はあなたがたの心をご存じである。人々の間で尊ばれるものは、神には忌み嫌われるものだ。律法と預言者は、ヨハネの時までである。それ以来、神の国の福音が告げ知らされ、誰もが激しく攻め入っている。しかし、律法の一画が落ちるよりは、天地の消えうせるほうが易しい。」（ルカ16：14～17）

主イエスは、「二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を疎んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない」と言われた。神と富の両方を追うことはできない、神に仕えることに心向けなさいと言われた。主イエスの話を聞いていた、金に執着するファリサイ派の人々は嘲笑った。律法を守り、神への信仰を篤くしている者が経済的にも恵まれると考えていたからである。自分たちは神の祝福に与り、金持ちであることを当たりまえとしていたのである。そこで、主イエスは彼らに、「あなたがたは、人に自分の正しさを見せびらかすが、神はあなたがたの心をご存じである。人々の間で尊ばれるものは、神には忌み嫌われるものだ」と言われた。ファリサイ派の人々は民衆に律法を教え、守れと説き、自分たちは正しい生き方をしていると見せていた。しかし、神は彼らの偽善を見通しておられる。マタイ福音書23章4節には「彼らは、背負いきれない重荷をくくって、人の肩に乗せるが、自分ではそれを動かすために指一本貸そうともしない。そのすることは、すべて人に見せるためである」と、主イエスの彼らへの非難を記している。彼らは人に負いきれない律法遵守を強制しながら、何の手助けもせず、自分が正しい者であることを誇っている。人間の間で褒め称えられることは、神には排斥される。主イエスは、人間が望む価値観と神が人間に求める思いは違うと言われた。そして、「律法と預言者は、ヨハネの時までである。それ以来、神の国の福音が告げ知らされ、誰もが激しく攻め入っている」と言われた。律法と預言者（旧約）は、ファリサイ派の人々が最も大切なものとして、固執していた。それらは、洗礼者ヨハネの時代までで、ヨハネ以降は、全く新しい時代が到来した。律法に締め付けられていた時から、主イエスによって神の国の福音（新約）が告げられ、解き放たれた時代に変換した。「激しく攻め入っている」とは、安息日であっても病を癒やされる律法破壊が起こっていることなどを言っている。しかし、本来の律法は神に従う道筋を示したものであるから、天地が滅びようとも、一点一画も消え失せることはない。主イエスは、ファリサイ派の人々の形式的な律法遵守ではなく、告げられた神の国で律法を喜び、律法を生きる者と変えられるという意味において、律法は有効であると説いておられる。

主イエスは続いて、「妻を離縁して他の女と結婚する者は誰でも、姦淫の罪を犯すことになる。夫から離縁された女と結婚する者も、姦淫の罪を犯すことになる」と語っておられる。当時は、男性中心の社会で、夫は妻に少しでも不都合があると安易に離婚していた。離婚された女性は、仕事などに付けないから、大きな苦勞を受けた訳で、主イエスの離婚を戒めた言葉として読むべきであろう。この言葉は、今日では妥当性はないことは当然である。離婚は残念なことであるが、離婚せざるを得ない事情もある。離婚後の結婚のあり方は、男女とも自由である。